



ドイツ・ウクライナ訪問 2014年2月7日～16日

チェルノブイリ救援中部 2月訪問団 千葉 親子
《マイウエンハイム・チェルノブイリ原発。ナロジチ》

長くて重たいテーマを抱えながら、10日間のチェルノブイリ訪問から帰ってきました。日本を離れている間に、都知事選挙が終わり、私は、深いため息をついてしまいました。

日本の良識はもう福島を忘れたのか！！



成田空港に帰り着いて、初めに買った新聞に「エネ計画は来月決定」自民党の高市早苗政調会長が「電力の安定供給がなければ暮らしも雇用も守れない」と指摘し基本計画に原発の再稼働に向けた内容になると示唆した、と書いてあった。

会津弁で時々どうにもならないやつらを罵倒するとき「この！！ばかたれが！！」と言いますが、思わず「このバカたれが、お前本当に子どもを産み育てるおなごか、福島的女は本気だぞ」と声を出してしまいました。

今回の旅の主な課題は、20年以上にわたって交流、支援活動をしている、チェルノブイリ救援中部の2月訪問団の一員として参加しました。

ウクライナの被災地での農業復興に取り組んでいるジトミル農民協議会メンバーとの懇談や汚染地での農業の可能性に取り組む、チェルノブイリ救援中部と共同研究「菜の花プロジェクト」を取組んだ、農大訪問。自然再生エネルギーの村、マウエンハイムのBGプラント視察。耕作を続けながら次の世代に大地を引き継ぐために、買ってもらえない農産物の生産から、加工品にすることで農業の維持を図るための取り組みと調査活動をおきました。

そして、原発視察では、30キロ圏内に住むサマショーロのお宅にお邪魔をしました。

集落の廃屋の多い中に移住地から自分の家に戻り生活を続けています。高齢のご夫婦はとても明るく移住先から戻って農業をしていますが、汚染地域なので収穫したものは販売できず、自分達が食べる自給食料、野菜の栽培をしています。

水道、電気などのインフラは整備されているようですが、公共施設、商店などはなく、定期的に移動販売車が来ているとのこと。



第2ゾーンの中にある小・中学校や保育園では元気な子供たちに出会う事が出来ました。28年経ったいま、300人以上いた園児が今は100人、事故前の人口の3分の1だそうです。放射能管理区域の黄色いマークの立札が住宅地や林の中にたてられて、高濃度の家は、除染のため地中に埋設されていました。もちろんその上には黄色いマークの立札です。私は、福島現状をお伝えし、その当時のことをお聞きしました。移住できる人とできない人、家族の分断がここにもあったことなど、

お話ししながら涙ぐむ先生の姿に、原発の「不条理で差別的で、理不尽で世代間不公平」なものはないと言われていることを改めて思い、それがすべての国、すべての原発に通ずることと強く思いました。

消防局の方やチェルノブイリ博物館では、原発事故当時の消防士の消火活動のようすをお聞きしました。事故の内容も放射能の知識も被曝についても何の情報もない中で消火作業が続けられ、被曝を余儀なくされた原発事故現場は最悪です。日本の東電福島第一原発事故現場は労働環境も雇用形態も、健康管理も劣悪、もっと最悪です。いずれの国も原発の隠ぺい体質と原発を稼働する限り、あらゆる現場で被曝者をだしてしまうということは同じなのです。



日本人形の手作り「しおり」をプレゼントしました



日本はもっと国民の生きる権利と人権を守ること、補償を含め生活権を守ること原発労働者の国レベルでの対処が必要です。そして何よりも原発の完全廃炉。再稼働は許さない！！子どもたちの未来を守るには、私たち大人の意思決定が大きな責任です。東京電力第一原子力発電所の事故から間もなく3年目になります。今何をしなくてはならないのか、28年目のチェルノブイリで見た事、聞いたことが、これからの私の課題の指針になる様にじっくりと振り返り、多くの人と、思いを共有していきたいと思っています。



詳細は、またお目にかかる機会にご報告したいと思います。
美味しかった食事とワイン、ちょっぴり観光と行く先々の素敵な出会いに感謝します。

2014年2月18日